

明智光秀の首塚



2020年のNHK大河ドラマは「麒麟がくる」で明智光秀の物語でした。この光秀が最後、大事件を起こしたのが「本能寺の変」です。そして「三日天下」（実際には11日）と言われた光秀の最後は京都です。その上、光秀の首塚があるのも京都です。

天正10年（1582年）6月2日早朝、京都・本能寺に宿泊していた織田信長を急襲し、自害せしめたのですが、まさかの羽柴秀吉が「中国大返し」により6月13日に「山崎の合戦」となります。しかし、秀吉側4万、光秀側1.3万の戦力差、「信長は生きています」という情報戦、光秀側の優秀な火縄銃が雨天で使用できない、と言った具合で士気が上がらなかったといえます。伊勢貞興らが討死し、勝竜寺城に撤退します。その勝竜寺城は手狭で収用できず、兵士の大半は脱走、逃走します。再起を期して勝竜寺城を脱出し、妻子らがいる本拠地の坂本城を目指します。しかし、その途中の夜半、京都山科の小栗栖の藪（現在は明智藪の名称がつけられています）にて、土民らの落ち武者狩りに遭遇し、竹槍に刺され、「これまで」と、付き従っていた家来の溝尾庄兵衛（溝尾茂朝）に介錯させ首を「知恩院に届けよ」と言って自刃しました。溝尾庄兵衛はその首をもって知恩院近くまで来ましたが夜が明けてきて首が奪われるのを避けるため、地面に埋めたのです。しかし光秀の首は6月15日までに見つかり、京の東の玄関口にあたる栗田口にて、晒され、22日頃に付近に埋められ、そこに首塚が築かれたそうです。

その後、光秀の子孫とされる能楽師の明田利右衛門が塚の石塔を東山区梅宮町の自宅に移したと伝えられます。1825年には光秀の250回忌が営まれ、首塚は宗教施設として整備されていったと言われます。そして現在の場所に安置されたのは「光秀の300回忌」などで気運が高まった1881年以降であろうと言われています。

明智光秀の首塚とされる供養碑・墓には「東梅宮並明智光秀墳」の文字が見えます。光秀の戒名は「長存寺殿窓玄智禅定門」と刻まれています。

公家・吉田兼見の日記「兼見郷記」には、首はすぐに発見され栗田口に数日間晒された後、近くに埋めて塚が築かれたことが記されています。塚は蹴上げ周辺にあり、「少しでも触れると祟りがある」と恐れられていたようです

現存する光秀の首塚は地下鉄東西線東山駅下車。三条白川の川に沿って南へ下がります。

するとすぐに和菓子店「餅寅」が目に入ります。その前の露地を東へ。すぐです。現存の塚を守って居られるのが有志住民の「梅光会」でその中心人物は露地の入り口に店を構える「もちとら」の店主です。



{落ち武者狩り}



おちむしゃがりは日本の戦国時代に百姓が自分の村の地域自衛の一環として、敗戦で支配権力が変わったときに敵方の逃亡武将（落武者）を探して略奪し、殺害した慣行です。武将の鎧や槍、刀などの装備を剥いで金品など得たりするためでもあり「落ち武者襲撃慣行」とも呼ばれていました。室町時代初めにすでに原型が見られ、室町中期には京都周辺で僧兵の落人狩りが幕府の呼びかけでなされました。敗者を「法の外の人」とみる中世以来の習慣の存在と、村の問題は自分たちで解決する自力救済の考えに基づく成敗権と武力行使が根底にあり、特に戦国時代には慣行として許され、地域では惣村の力が強く慣行には手をつけられない面があり、広く展開し、豊臣秀吉の「惣無事令」から始まる身分固定成敗権の否定を伴う一連の政策まで存続していました。

{戦国時代を表した映画}

戦国時代のこの辺りの状態を描いた映画があります。黒澤明監督の「七人の侍」です。四人の脚本家が練り上げた優れたものです。上映時間3時間30分と長い映画ですが、半ば頃に百姓の家から鎧、槍、刀などが多数出てきます。それを見た七人の侍たちは凍り付きます。当時の社会形体・構造、百姓の生活、武士の生き様などが巧みに織り込まれています。



「明智光秀の場合」



羽柴秀吉との「山崎の戦い」で敗戦後、光秀はわずかな手勢で「勝竜寺城」から近江の坂本城へ逃れる途中、小栗栖の竹藪で土民に打たれたとされます。一説には付近の土豪であった飯田一族に打たれたとも。飯田一族の飯田佐吉右衛門は信長に仕えており本能寺の変で追腹を切ったが、その恨みだったと言われています。光秀が討たれた藪は「明智藪」と呼ばれ今に伝わっています。この「明智藪」は「本経寺」というお寺の境内にあります。境内には明智光秀の供養塔があります。「悲運の戦国武将明智光秀の供養を捧げて歴史の一端を伝える」と駒札に記してあります。



また、この「明智藪」から少し離れた場所に明智光秀の「胴塚」があります。個人の方の庭の一部にあるようです。石碑には「明智光秀之塚」と彫られています。どうしてこの場所にあるのかは資料皆無です。



「徳川家康の場合」

「神君伊賀越え」の徳川家康は天正10年6月2日には堺見物を終わって、もう一度信長に会ってお礼を言った後、帰路につこうとしていました。そこへ京都で商いをしている茶屋四郎次郎が本能寺の変を知らずべく駆けつけばったり出くわしたのです。その場で事件の一部始終を聞かされた家康は、京都に駆け戻って自刃しようかとも思ったのですが、家来たちの説得でとりあえずこの場合は、一刻も早く自国へ帰り着くことだと悟ったそうです。帰路のルートも、まず考えられるのが一番容易で安全として考えたのは、ちょうどこの時期、四国責め出陣準備のため大阪に集結していた信長の三男神戸信孝（織田信孝）・信長重臣丹羽長秀（後の清洲会議で重要な役割を果たす）の軍団に合流し、その庇護のもと、海路にて国元に帰る、というのが考えられたと思われます。しかしこの軍団に信長自刃の報が入るやいなやたちまち逃亡兵が出て軍団は壊滅状態になったとも言われます。更に悪いことにこの軍団には織田信澄（信長により殺害された信長の弟の長男）という光秀の娘婿がいましたが神戸信孝等は疑心暗鬼となり、あっという間に殺害してしまいます。こういった情報はどのくらい家康側に伝わったのでしょうか。結局、このルートは信長の目（後ろ盾）がなくなった今はこれも疑心暗鬼に陥り取りやめになったのでしょうかね。次に選んだのは最もオーソドックスな方法、すなわち徒歩でなるべく人里離れた山中の逃避行です。これには伊賀地方に縁故のある茶屋四郎次郎、服部半蔵等の家臣団の活躍で険しい山中やいつ襲われるかもしれない山里をくぐり抜け、無事に三河に帰還できたのです。



「穴山梅雪の場合」

徳川家康が武田責めの功績で駿河一国を信長より加増されたための、お礼参上のため安土城行へ、その家康一向に穴山梅雪は同行していました。穴山梅雪は早くから武田側を離れ信長側に味方したのを認められ領土安堵の御墨付けを貰ったお礼参上です。梅雪は信君ともいい、正室は武田信玄の次女・見性院で武田一門衆であったのです。信玄の死後跡を継いだ武田勝頼とはそりが合わず信長が武田領侵攻後は完全に離反しています。

梅雪は安土お礼参上の後も家康と一緒に堺見物に行っています。そして信長の遭難事も聞いていたでしょう。この辺までは家康と行動、情報は一緒だったでしょう。「しかしさてよ」となったのでしょうか。梅雪にとって信長という後ろ盾がなくなり、その時点で、疑心暗鬼になり「ひょっとしたら」と途中から家康一行とわかれて、自分たち小人数で脱出を試みたのです。これが不運にも裏目に出て京都の宇治田原で落ち武者狩りに遭遇したのです。一説に依れば着ていた服装が美麗だったのが原因とする説もあります。また、家康帰国後、ただちに穴山衆を配下に収めたということから、家康謀略説もあります。梅雪の家来が誤って道案内人を殺害したので土民に返り討ちに遭ったとも。この辺りの資料は皆無らしいので、いろんな説が飛び交います。後世においても想像をめぐらすことはロマンがあります。

